



# 東アジアの思想と構造

# 『家礼』の和刻本について

吾 妻 重 二

## On Japanese version of Zhuxi's *Family Rituals*

AZUMA Juji

Zhu Xi's *Jiali*, *Family Rituals* was widely read in Korea, Ryukyu and Vietnam as well as China and became the most important book of Confucianism rituals in pre-modern East Asia. In Japan this book was also accepted and several Japanese version, Wakoku-bon was published in Edo period. But there are almost no studies about those texts up to now. In this paper, I will take up three kinds of Japanese version of *Jiali* and do research on its formation, characteristic, and Chinese original text. These texts are: *Jiali* 5volumes by ASAMI Keisai, *Wengong Jiali Yijie* 8volumes, and *Jiali* 4volumes in *Xingli Daquan* by KOIDE Eian.

キーワード：朱熹、丘濬、『文公家礼儀節』、『性理大全』、浅見綱斎、小出永安

### はじめに

朱熹の『家礼』は冠婚喪祭の儀礼をとり行う日常の実践マニュアルとして、中国のみならず朝鮮、琉球、ベトナムなどの近世東アジアにおいて広く受容され、その国々の儒教儀礼の形成や普及に重要な役割を果たしてきた。江戸時代の日本においてもこの書は儒教への関心とともに広く読まれ、翻訳や解説、研究などさまざまな関連文献が著わされている。

『家礼』和刻本の出版は、そうした日本における『家礼』受容を物語る一つであって、当時の書目などによるとかなり多くの部数が出版され、読者を得ていたようである。そもそも江戸時代、もっぱら長崎を通じて輸入された漢籍はさわめて多数にのぼるが、その価格は高く、一般には入手が難しかったため、日本の書肆はこれを覆刻して読者の要求に応えようとした。こうした大量に出版された和刻本には普通、返り点や送りがななどの訓点が附され、日本人はほとんどの場合、この和刻本を通して中国の典籍・文化を学んだのである。

さて、筆者の調査によれば、『家礼』関連の和刻本は少なくとも四種類ある。すなわち、浅見綱斎点『家礼』五巻・図一卷、『文公家礼儀節』八巻、小出永安点『新刻性理大全』家礼部分四巻（巻十八から巻二十一まで）、そして『居家必用事類全集』の家礼部分（乙集すなわち巻三・巻四）であるが、これら和刻本について検討した研究はこれまでないようである。そこでこれらを取りあげ、その成立や特色、底本

になった版本などにつき考察することにした。

ただし、このうち『居家必用事類全集』の家礼部分は『家礼』本来の記述を大幅に省略し、骨子のみを載せている。この書はいわゆる日用類書の一つとして日常生活の中で使われるハウ・ツー本であった。そこに『家礼』の概略が載ったことの意義は小さくないのだが、内容がかなり略されているため、ここではとりあげなかった。この書については他の機会に論じたので<sup>1)</sup>、そちらを参照されたい<sup>2)</sup>。

## 一 和刻本『家礼』（浅見綱斎点）

### 1 成り立ち

和刻本『家礼』の校点者浅見綱斎（一六五二——一七一二）は江戸時代中期の朱子学者である。近江高島の人で名は安正、通称は重次郎。京都に出て医者となったが、二十八歳の時山崎闇斎（一六一九——一六八二）に入門し、研鑽を重ねて闇斎門下を代表する人物となり、佐藤直方・三宅尚斎とともに「崎門三傑」と称せられた。性格は剛毅で闇斎の垂加神道に承服せず、またその敬義内外説を批判したことにより破門されるが、方針を変えず京都に塾を開き、生涯仕官せずに学問と講義にとりくんだ。

著作は『靖献遺言』八卷、『靖献遺言講義』二卷、『白鹿洞揭示考証』一卷、『拘幽操附録』一卷、『四箴附考』一卷、『批大学辨断』一卷などの刊本のほか、『易学啓蒙講義』三冊や『論語筆記』三卷、あとにいう『家礼』関係の筆記をはじめとする多くの講義録が写本で残されている。その文集『綱斎先生文集』十三巻も写本で伝わる<sup>3)</sup>。

綱斎の著作でとりわけ有名なのが『靖献遺言』である。この書は国家に身を殉じた屈原、諸葛亮、陶淵明、顔真卿、文天祥、謝枋得、劉因、方孝孺という中国の忠臣義士八人の評伝を収めて大義名分論を宣揚したもので、水戸学をはじめとする幕末の尊王攘夷派の志士に大きな影響を及ぼしたことで知られる。

綱斎はまた『晦庵先生朱文公文集』（朱子文集、正徳元年〔一七一〕刊）や『大戴礼記』（元禄六年〔一六九三〕刊）の校訂と訓点をほどこしており、いずれも篤実な仕事として評価が高い<sup>4)</sup>。

さて、『家礼』に関して綱斎は宝永二年（一七〇五）、継母の死に際して『家礼』の講義を始めており<sup>5)</sup>、これを門人の若林強斎が『家礼師説』一冊として筆記している。ほかに『家礼紀聞』（浅見綱斎先生雑記一一）や『喪祭小記』『喪祭略記』各一冊の筆記も残している。そもそも崎門派では『家礼』を他学派よ

1) 『居家必用事類全集』に関しては、吾妻重二編著『家礼文献集成 日本篇五』（関西大学東西学術研究所資料集刊二十七一五、関西大学出版部、二〇一六年）の解説を見られたい。

2) 本稿は吾妻重二編著『家礼文献集成 日本篇六』（関西大学東西学術研究所資料集刊二十七一六、関西大学出版部、二〇一六年）の解説を補訂したものである。

3) 近世儒家文集集成第二巻『綱斎先生文集』（影印、ペリカン社、一九八七年）。

4) 『朱子文集』の校点とその正確さについては、近藤啓吾『浅見綱斎の研究』（神道史学会、一九七〇年）七八頁、友枝龍太郎『朱子の思想形成 改訂版』（春秋社、一九七九年）の付録一「朱子語類の成立 付・朱子文集」を参照のこと。『大戴礼記』の校点については、『和刻本経書集成』第四輯（汲古書院、一九七七年）の長澤規矩也解説を参照。

5) 注4前掲、近藤啓吾『浅見綱斎の研究』の「年譜」四二三頁を参照。

りもいっそう重視する傾向があり、闇斎自身『家礼』にもとづく儒式葬祭儀礼を行うとともに、『文会筆録』一之二および一之三において『家礼』の記述につき論じている<sup>6)</sup>。三宅尚斎による『家礼』の詳細な注解『朱子家礼筆記』九冊（写本）や若林強斎の労作『家礼訓蒙疏』四卷（刊本）も、このような崎門派の『家礼』学から生み出された成果であった<sup>7)</sup>。

さて、和刻本『家礼』五卷・図一卷は綱斎が校点し、図を附して刊行したもので、全三冊からなる。第一冊は第一巻から第三巻まで、第二冊は第四巻と第五巻を収め、第三冊が家礼図となっている。ここに掲げた書影は関西大学総合図書館蔵本（請求記号：三八五一S二一一～三）である（図1）。京都の秋田屋平左衛門、大坂の河内屋喜兵衛、江戸の須原屋茂兵衛から寛政四年に共同出版された再刊本で、これらの書肆は三都を代表する大版元であるから相当部数を刷ったものと想像される。綱斎点『家礼』はこれ以外にも寛政八年、天保二年、嘉永五年などの後印本があり<sup>8)</sup>、かなり広く読まれたことがわかる。

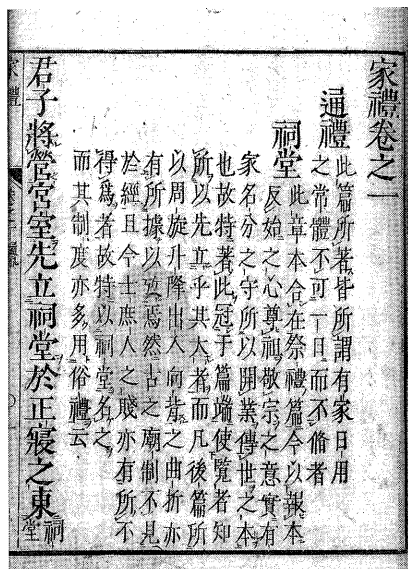


図1 和刻本『家礼』巻一卷首

さて、この版は第二冊末尾の識語に「元禄丁丑季冬日 浅見安正謹識」（図2）とあって、元禄十年（一六九七）十二月に校点が完了したことがわかり、出版もこの時であったと思われる<sup>9)</sup>。ただ、一つわからないのは、あとに続く刊記に「延寶三年乙卯春三月 壽文堂旧板焼亡／寛政四年壬子年秋九月再刻成」とあることで、これによれば延宝三年（一六七五）寿文堂にあった版木が焼失したため、寛政四年（一七九二）に版木を再刻し刊行したという。だが、延宝三年は綱斎の『家礼』校点が成る元禄十年よりも二十二年も前のことである。寿文堂とは上述の『晦庵先生朱文公文集』八十冊のほか、『文会筆録』二

6) 『増訂 山崎闇斎全集』第一巻所収（影印、ベリかん社、一九七八年）一〇二—一三八頁。

7) 吾妻重二編著『家礼文献集成 日本篇一』（関西大学東西学術研究所資料集刊二十七—一、関西大学出版部、二〇一〇年）解説参照。また同書に『家礼訓蒙疏』を影印掲載した。

8) 長澤規矩也『和刻本漢籍分類目録 増補補正版』（汲古書院、二〇〇六年）一三頁および二三八頁。

9) そのことは、元禄十一年の出版目録『増益書籍目録』（丸屋源兵衛）に、浅見点『家礼』が「家礼元本」として載っていることからわかる。市古夏生『元禄・正徳 板元別出版書総覧』（勉誠出版、二〇一四年）二三二頁参照。

十八冊、『玉山講義附録』五冊など山崎闇斎およびその門人の編著書を多く出版した京都の書肆、武村市兵衛の堂号であって<sup>10)</sup>、この記事信じれば、延宝三年以前に早くも『家礼』の和刻本が出版されていたことになる。しかし、そのような早期の版本は現在のところ確認できず、また長澤規矩也『和刻本漢籍分類目録 増補補正版』もおそらくこの刊記によったのであろう。『家礼』につき「延寶三刊（壽文堂）」と著録してはいるものの、テキスト自体は「未見」としている<sup>11)</sup>。再刊したという寛政四年が延宝三年から百二十年近く隔たっていることも考えあわせると、この記事にはどこか誤りがあるように思われる。が、いずれにしても『家礼』和刻本の初版がこの綱斎校点本であることはまず間違いないであろう。

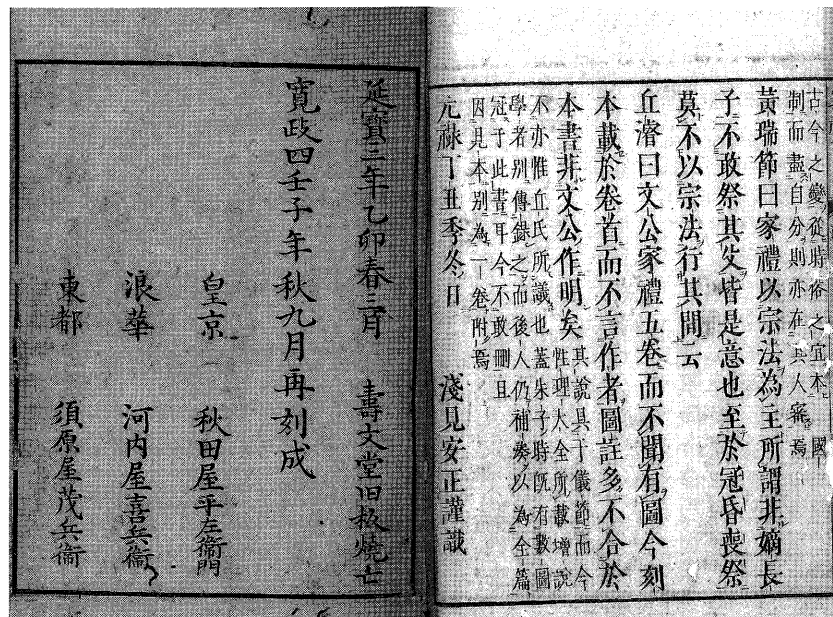


図2 和刻本『家礼』識語および刊記

この版の匡郭上には枠つきで「某当作某」といった校記がある。上述した『晦庵先生朱文公文集』と『大戴礼記』の校点本にも同様に匡郭上の校記がつけられており、綱斎の作業の綿密さをよく示すものとなっている。

なお、国立公文書館（内閣文庫）には昌平坂学問所旧蔵の綱斎校点本『家礼』を蔵する（請求番号：二七四——〇一）。版式はほぼ同じで綱斎の跋もつくが、刊記はなく、匡郭上の校記もやや違う。あるいはこれが元禄十年における綱斎校点本の初版であるかもしれない。

当和刻本の成り立ちについては、綱斎識語に次のようにある。

丘濬曰、文公家禮五卷而不聞有圖、今刻本載於卷首而不言作者、圖註多不合於本書、非文公作明矣〔其說具于儀節、而今性理大全所載增說不亦惟丘氏所議也。蓋朱子時既有數圖、學者別傳錄之而後人仍補湊以爲全篇、冠于此書耳。今不敢刪、且因見本別爲一卷附焉〕

10) 注9前掲、市古夏生『元禄・正徳 板元別出版書総覧』二三四頁以下。井上宗雄ほか編『日本古典籍書誌学辞典』（岩波書店、一九九九年）三七五頁の「武村市兵衛」。

11) 注8前掲、長澤規矩也『和刻本漢籍分類目録 増補補正版』一三頁。

ここに引用される丘濬の語は、その『文公家礼儀節』序の双行注に見えるもので、明の「性理大全」所載の家礼図は『家礼』本文と齟齬があるため、朱熹の作ではあるまいという。綱齋はそれを認めつつ、朱熹の時にすでに書かれていたいくつかの図をもとに後人が増補して今のかたちになったはずだから、これを削除せずに一卷として附したとする<sup>12)</sup>。「性理大全」本『家礼』にはもともと巻首に図が冠されているのだが、ここでは図を後に附したというのである。和刻本『家礼』は版本によっては図を巻首に置く場合もあるが（筆者家蔵本がそれ）、図を最後に附するこのかたちが綱齋点『家礼』本来の体裁といえよう。この体裁は先ほど触れた国立公文書館の昌平坂学問所旧蔵本も同じである。

## 2 和刻本の底本など

ところで、綱齋の文集にはこの跋と同文を「書原本家禮後」として載せている（『綱齋先生文集』巻十一）。当時の出版目録もこれを「家礼元本」として載せている<sup>13)</sup>。つまりこの五巻本を『家礼』の「原本」とするわけであるが、これについては検討すべきことがある。この体裁が綱齋独自の復元と思われるからである。

『家礼』につき先駆的研究を行なった阿部吉雄氏は、綱齋校点本について「我が國の淺見綱齋點本も、大全に就いて注を去り、文字を校正したものとされている」といっている<sup>14)</sup>。阿部氏がその根拠を示していないのはまことに遺憾であるが、結論からいえば阿部氏の見解は正しいように思われる。というのも、中国における『家礼』の旧版本にこの綱齋校点本のような体裁は伝わっていなかったと考えられるからである。

そもそも『家礼』には二つの版本系統がある。すなわち、

A 周復五巻本の系統 …… 宋版、公善堂覆宋刊本、明版、四庫全書本、郭嵩燾本

B 性理大全の系統 …… 纂図集註本、朱子成書本、性理大全本、和刻本

である。この二系統の存在はこれら諸版本相互の文字の異同からわかるのであるが、綱齋校点本（和刻本）はB系統すなわち性理大全本の系統に属している<sup>15)</sup>。ところが、B系統の版本は、南宋の「纂図集註」本（『纂図集註文公家礼』）は十巻、元の「朱子成書」本（黄瑞節編『朱子成書』所収本）は一卷、「性理大全」本は四巻であって、いずれも五巻本ではない。要するにBの「性理大全」系統で五巻本という版本は和刻本以外、存在しないのである。一方、A系統の方は南宋末の周復による五巻本が原本であって、現存する『家礼』の版本の体裁としては最も古く、本来の形に近いものをもってはいるが、「家礼附録」として楊復の注を巻五のあとに附すなど、実際には朱熹の『家礼』原本とは違うものである<sup>16)</sup>。し

12) 「性理大全」本の家礼図は、元の黄瑞節がまとめたものであることが確実である。吾妻重二『朱熹『家礼』の版本と思想に関する実証的研究』（科学研究費補助金・基盤研究（C）（2）研究成果報告書、二〇〇三年）二九頁以下を参照。

13) 注9前掲、元禄十一年の『増益書籍目録』など。

14) 阿部吉雄「文公家禮に就いて」（『服部先生古稀祝賀記念論文集』、富山房、一九三六年）三六頁。

15) 『家礼』の諸版本について、詳しくは注12前掲、科研報告書の「校勘本『家礼』」の解説を参照されたい。

16) 南宋の『郡齋讀書志・附志』に「家禮 五巻」とあることから、原本が五巻だったことは確実である。ただし、そのまゝの版本は後世、伝存しなかった。吾妻重二「『家礼』の刊刻と版本——『性理大全』まで」（『関西大学文学論集』第四十八巻第三号、一九九九年）参照。注12前掲の科研報告書にこの拙論の補訂版を載せた。

かも綱齋がこのA系統の版本を参照した形跡はない。

ついでに朝鮮版を調べてみよう。綱齋が朝鮮刊本を見てそれを「原本」とした可能性も否定できないからである。しかし朝鮮刊本は四巻本もしくは七巻本であって、五巻本はやはり見当たらないようである。朝鮮刊本を詳細に調査した張東宇氏によれば、明宗十八年（一五六三）に「性理大全」の中から『家礼』のみを独立させ木版で刊行した四巻本が登場し、その後、孝宗九年（一六五八）に七巻本が登場して、英祖三十五年（一七五九）には芸閣において戊申字を用いた七巻本活字本が刊行された<sup>17)</sup>。いま『韓国所蔵 中国漢籍総目』を見てもそのことは裏づけられるのであって、そこに著録される『家礼』で五巻と明記されているものは一本もない<sup>18)</sup>。近年、ソウルから影印出版された『朱文公家礼』に載せるのは七巻じたてのもので、戊申字刊本の系統らしく<sup>19)</sup>、巻頭に家礼図を置き、巻一が通礼、巻二が冠礼、巻三が昏礼、巻四が喪礼一、巻五が喪礼二、巻六が喪礼三、巻七が祭礼である。図3に巻七・巻首部分の影印を掲げておいたので参照されたい。

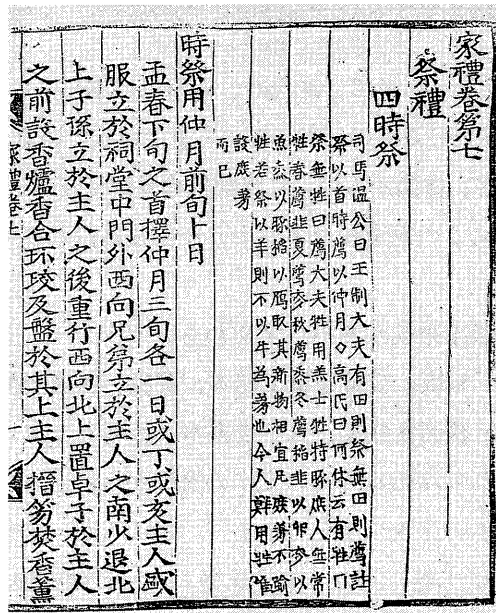


図3 朝鮮刊本（七巻本）『家礼』巻七巻首

このほか、江戸時代に伝来した朝鮮刊本『家礼』としては国立公文書館（内閣文庫）蔵本がある（請求番号：二七四一一〇六）。その刊記によれば万曆三十一年（一六〇三）の川谷書院本で、林鷺峰（一六一八—一六八〇）が次男の鳳岡に教授し訓点を書き入れたテキストなので、江戸時代のかなり早期に伝わったものとわかる<sup>20)</sup>。これは四巻じたてであり、内題に「家礼大全」とあるように、前述した「性理大

17) 張東宇、篠原啓方訳『朱子家礼』の受容と普及——東伝版本の問題を中心に（吾妻重二・朴元在編『朱子家礼と東アジアの文化交渉』所収、汲古書院、二〇一二年）。

18) 全寅初主編『韓国所蔵 中国漢籍総目』（学古房、ソウル、二〇〇五年）第一冊、一五五頁以下。

19) 『朱文公家礼 全』（아름出版社、ソウル、二〇〇一年）。

20) 同書の巻末書入れに「戊申九月三十日口授仲龍加訓點畢 林學士」「己酉十月二十三夜加朱句了 林鸞」とある。ここにいう「林學士」は林鷺峰、「仲龍」「林鸞」はその子の林鳳岡である。「戊申」は寛文八年（一六六八）、「己酉」

全」から『家礼』のみを独立させた版本らしい。内訳は巻一が家礼図、巻二が通礼・冠礼・昏礼、巻三が喪礼、巻四が喪礼の続きおよび祭礼で（図4）、後述する「性理大全」本と一致している。結局のところ、

#### C 朝鮮刊本 …… 四卷本もしくは七卷本

ということになり、朝鮮刊本が綱斎の拠った版本でないことは明らかである。

考証が細部にわたったが、要するに綱斎は「性理大全」本『家礼』を底本としつつ、『家礼』の原本とされる五卷本を復元したわけである<sup>21)</sup>。ただし、そのような『家礼』テキストは実際には中国にも朝鮮にも伝存しておらず、綱斎独自の判断によるものなのであった<sup>22)</sup>。

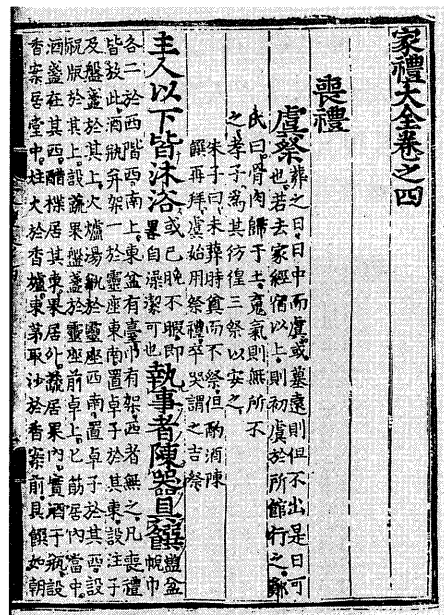


図4 朝鮮刊本（四卷本）『家礼』巻四卷首

さて、『綱斎先生文集』巻八には「讀家禮」の文章が見える。やや長文であるが、綱斎の『家礼』理解をよく示すと思われるので以下に全文を引用する。

#### 讀家禮

朱子家禮一書、所以本名分紀人倫而固有家日用之不可得而闕者也。然世之學此書者、本不考乎所謂名分人之實而徒區區於儀章度數之末、欲以施諸日用。是以拘泥煩雜、每苦以難行而無味也。蓋有天地、然後有人倫、然後有（然後有）禮儀、則無古今、無遠近、不容於一日離禮而立。若夫因時而變、隨地而處則自有當然之宜、而審察而能體焉則莫往不天地自然之理矣。世之不明於此者、或據禮書之本文、必欲事事而倣之、句句而守之、則於本心人情已有不安者、而言語之便、衣服之制、器械之度、

はその翌年の寛文九年（一六六九）である。

21) 『家礼』がもともと五卷本であったことは南宋・趙希弁の『郡齋讀書誌』附志に「家禮 五卷」とあることからわかる。

22) 注12前掲、科研報告書の「校勘本『家礼』」の解説では、綱斎は性理大全系統の五卷本を点本にしたと述べたが、ここに訂正したい。

皆有不可彼此相強而通者、殊不知禮也者理而已矣。苟不得其理而惟禮文之拘、則先失我所以行禮之理、尙何得合名分人倫之本哉。是以予之譯諸和文以誘禮俗、其意非不切。而其所以書禮節之方、則因舊株守異國古制之跡、不明本邦天地一體、風俗時宜之理。不必禮書之說、則爲失儒者之體、不知以吾日本之人變於世俗之所謂唐人、其可謂錯名分、失大義甚矣。頃因講禮書、竊有所感焉、因筆記如此云。元祿戊寅仲夏某日、謹書。

これは『家礼』を校点した翌年の元祿十一年（一六九八）に書かれたもので、「儀章度数」や「禮文」すなわち『家礼』の細かな規定にはいちいちとらわれずに日本の国情を考慮していくことが重要であり、そうしてはじめて人間としての礼を保持することができるという。礼は人間と禽獸を分かち指標というのが朱子学の基本的考え方であって、綱齋は『家礼』にもとづきつつ、人間として持つべき規範＝理を日常の中に求めようとしたといえよう。「禮也者理而已矣」（礼なる者は理のみ）の語が示すように、礼とは理を表わすものにほかならず、したがってまた人間として普遍的なものと考えられたのである。

なお、浅見綱齋は『家礼』にもとづく神主（位牌）を作っており、『家礼』の実践者としても重要である。図5に載せたのがその神主で、近藤啓吾『儒葬と神葬』巻頭に掲げられた写真である<sup>23)</sup>。

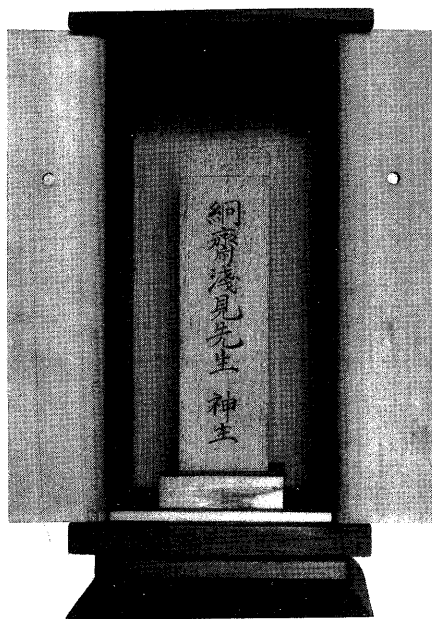


図5 櫛の中に納められた浅見綱齋の神主

## 二 和刻本『文公家礼儀節』（丘濬輯）

### 1 成り立ち

『文公家礼儀節』八卷は明代中期の丘濬（邱濬とも、一四一八—一四九五）が朱熹の『家礼』を実践しやすいよう再編した著作であり、日本でもその和刻本が出版された。

丘濬は明朝の有力政治家であるとともに、該博な朱子学者でもあった。広東瓊山の人で、字は仲深、

23) 近藤啓吾『儒葬と神葬』（国書刊行会、一九九〇年）。

号は深庵、玉峰など。翰林学士や文淵閣大学士に任じた功績により、死後、文莊と諡された。著作に『文公家礼儀節』のほか、『大学衍義補』百六十卷、『朱子学的』二卷、『塩法考略』一卷など、文集として『丘文莊公集』十卷があり、とりわけ『大学衍義補』は朱子学の政治思想に関する百科辞書の資料集として日本や朝鮮でも版を重ねた<sup>24)</sup>。和刻本としてはほかに『新刻丘瓊山故事雕龍』二卷、『新鐫詳解丘瓊山故事必読成語考』も出ている<sup>25)</sup>。

さて、丘濬『文公家礼儀節』はその序にあるように明の成化十年（一四七四）に著わされた。その方針については、序に次のように述べられる。

#### 文公家禮儀節序

禮之在天下、不可一日無也。中國所以異於夷狄、人類所以異禽獸、以其有禮。禮其可一日無乎。成周以禮持世、上自王朝以至於士庶人家、莫不有其禮。……文公先生因溫公書儀、參以程張二家之說而爲家禮一書、實萬世人通行之典也。……夫儒教所以不振者、異端亂之也。異端所以能肆行者、以儒者失禮之柄也。……自少有志於禮學、意謂海内文獻所在、其於是禮、必能家行而人習之也。及出而北仕於中朝、然後知世之行是禮者、蓋亦鮮焉。詢其所以不行之故、咸曰禮文深奧而其事未易以行也。是以不揆愚陋、竊取文公家禮本註、約爲儀節、而易以淺近之言、使人易曉而可行。

（礼の天下に在るや、一日も無かるべからざるなり。中国の夷狄に異なる所以、人類の禽獸に異なる所以は、其の礼有るを以てなり。礼は其れ一日として無かるべけんや。成周は礼を以て世を持し、上は王朝より以て士庶人の家に至るまで、其の礼有らざる莫し。……文公先生、温公の書儀に因り、<sup>まじ</sup>参うるに程張二家の説を以てして家礼一書を<sup>つく</sup>爲る。実に万世人通行の典なり。……夫れ儒教の振わざる所以は、異端之を乱せばなり。異端能く<sup>ほしまま</sup>肆に行なわるる所以は、儒者礼の柄を失うを以てなり。……<sup>わか</sup>少きより礼学に志す有り、意謂えらく、海内文献の在る所、其れ是の礼に於ける、必ず能く家ごとに行ないて人ごとに之を習わんと。出でて北のかた中朝に仕うるに及びて、然る後世の是の礼を行なう者、蓋し亦た<sup>すく</sup>鮮なきを知る。其の行なわれざる所以の故を<sup>たず</sup>詢ぬるに、<sup>み</sup>咸な曰く、礼文深奥にして其の事未だ以て行ない易からずと。是を以て愚陋を<sup>はか</sup>揆らず、<sup>ひそ</sup>窃かに文公家礼の本註を取り、約して儀節と爲して易うるに浅近の言を以てし、人をして<sup>さと</sup>曉り易くして行なうべからしむ。）

丘濬は、日常的に儀礼が履行されることによってはじめ中国と夷狄、人間と禽獸が区別されるという。文明と野蛮を区別するメルクマールが儀礼の有無に置かれているのであり、丘濬はそのような文明をもつ人間としての儀礼規範を他ならぬ『家礼』に求める。丘濬にとって『家礼』は「万世人通行」の普遍的典籍なのであった。ところが当時「異端」すなわち仏教や道教が侵入し、首都北京においても『家礼』はあまり実行されていなかった。その理由は儀式次第が「深奥」で実践しにくいところがあり、そこで『家礼』にもとづきつつ、わかり易い内容を提示することにしたという。

このように、『文公家礼儀節』は実践しやすさを主眼に著わされたものであり、その中の「儀節」部分で具体的な儀式マニュアルを指示するとともに新たな図を加え、さらに「余注」や「考証」を附して文献学的典拠を示しており、『家礼』よりもはるかに分量が多くなっている。

24) 注8 前掲、長澤規矩也『和刻本漢籍分類目録 増補補正版』一〇五頁。

25) 注8 前掲、長澤規矩也『和刻本漢籍分類目録 増補補正版』一五三頁、二六一頁。

全八巻の内訳は巻一が通礼、巻二が冠礼、巻三が昏礼、巻四が喪礼、巻五が喪葬、巻六が喪虞、巻七が祭礼、巻八が雜儀であり、特に喪礼部分を三巻に分けるのが特徴である。すなわち「初終」から「成服」および喪服制度、ついで「朝夕哭奠 上食」から「反哭」まで、さらに「虞祭」から「禫」までという三つの部分に分けているのであって、丘濬が葬儀を含む喪礼をいかに重視していたかが知られよう。なお、この三部分の区別は内題には記されず、版心に「喪禮」「喪葬」「喪虞」と記入されている。

このほか、巻八の「家礼雜儀」や「家礼附録」は、「司馬氏居家雜儀」以外はまったく新たにつけ加えられたもので、丘濬の苦心のほどを物語っている<sup>26)</sup>。『文公家礼儀節』はその後、さまざまな改訂版が出され、もとの朱熹『家礼』以上に多く印刷され普及することになった<sup>27)</sup>。

さて、ここに書影を掲げた和刻本は万治二年（一六五九）刊で、刊記にもあるように京都の大和田九左衛門により出版された後印本である（図7）。関西大学総合図書館蔵本で、請求記号はN 八一三八五——四。見返しの欄眉に横書きで「増訂大全」とあり、下に「楊升菴先生手定／文公家禮／種秀堂藏版 金閭舒瀛溪梓行」とあることから（図6）、明末の版本を底本としていることがわかる（後述）。校点者は不明である。この和刻本の出版は右に紹介した綱齋点『家礼』の出版よりも四十年近く早く、江戸時代初期、『家礼』といえはまずこちらの『文公家礼儀節』だったことは注意すべきであろう。

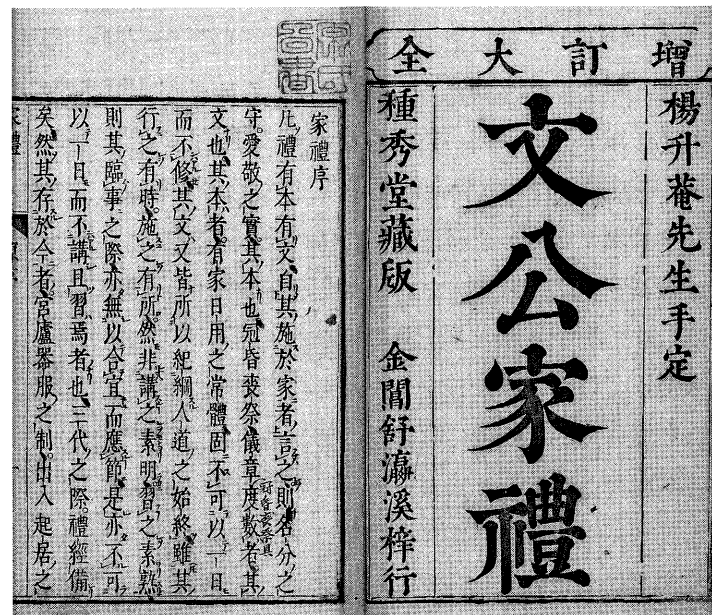


図6 和刻本『文公家礼儀節』見返し・序

26) 以上の内訳は、和刻本も、あとに述べる中国の諸刊本も同じ。「喪禮」「喪葬」「喪虞」の文字が内題になく、版心に記されるのも共通している。

27) Patricia Buckley Ebrey, *Confucianism and Family Rituals in Imperial China: A Social History of Writing about Rites*. Princeton University Press, 1991, pp. 173-176. 佐々木愛「明代における朱子学的宗法復活の挫折—丘濬『家礼儀節』を中心に—」（『社会文化論集』第五号、島根大学、二〇〇九年）。なお、四庫提要によると、一部の図は丘濬作とは考えにくく、書肆による竄入があるという。

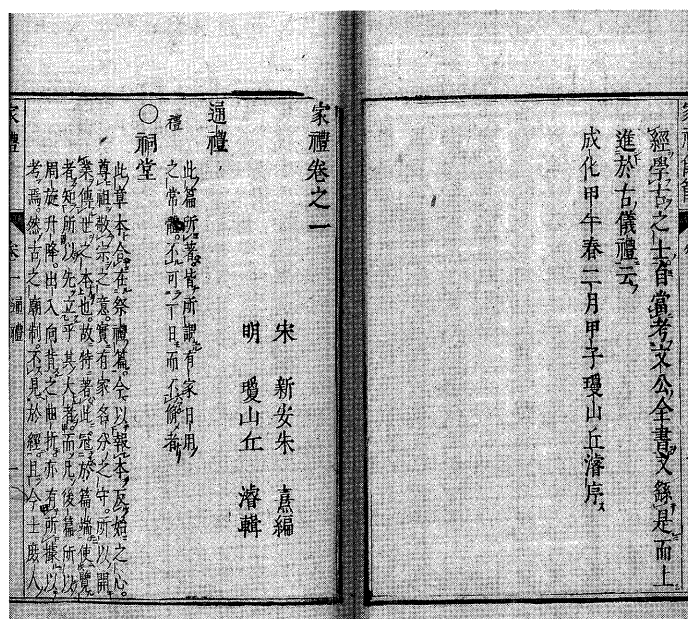


図7 和刻本『文公家礼儀節』巻一巻首

版元の大和田九左衛門は号を気求といい、江戸時代初期、京都で活躍した書肆兼学者である。大和田はこの『文公家礼儀節』刊行の八年後の寛文七年（一六六七）には、この『文公家礼儀節』を底本として『大和家礼』を撰述、刊行している。この『大和家礼』は江戸時代、『家礼』の本文をすべて和訳・解説した唯一の書であって、近世初期における『家礼』の受容をよく物語る書物にもなっている<sup>28)</sup>。

さて、当和刻本には形式上やや不整合なところがある。すなわち内題は「家禮」だが、冒頭の「家禮序」に続いては「文公家禮儀節目録」「文公家禮儀節序」（丘濬）が載り、この部分の版心にだけは「家禮儀節」とある。また、表紙に附された題簽では「文公家禮」とし、その下にそれぞれ「卷之一／通禮」「卷之二／冠禮」「卷之三・昏禮」「卷之四・喪禮」と記されているが、これらの巻数と章題は各冊の内容と一致していない。書名や巻数の表記におけるこれらの混乱は、一つには底本が明末の坊刻本であったことに起因するもののように思われる。

和刻本『文公家礼儀節』の出版は、実は慶安元年（一六四八）、京都の風月宗知による八冊本が最も早い。この版は未見だが万治二年刊本と同じく舒瀛溪本を底本にしていたようである。その後、『文公家礼儀節』は慶安四年（一六五一）、明暦二年（一六五六）、そしてこの万治二年（一六五九）の後印本があり、年次ははっきりしないが、これ以外にも少なくとも二種類の後印本が出ているから、たいへん多くの読者を獲得したものと見える<sup>29)</sup>。なお、延宝三年（一六七五）の出版目録『古今書籍題林』では、同書を、

文公家禮 宋朱文公編／明 瓊山丘濬輯

28) 吾妻重二編著『家礼文献集成 日本篇二』（関西大学東西学術研究所資料集刊二十七一二、関西大学出版部、二〇一三年）に『大和家礼』の全文を影印・翻刻するとともに、解説を加えたので参照されたい。

29) 以上、注8前掲、長澤規矩也『和刻本漢籍分類目録 増補補正版』一四頁、二三八頁。

通礼冠昏喪祭及ヒ雜礼、古今經子史集ヲ校ヘ記ス、間圖ヲ用ユ<sup>30)</sup>  
と宣伝し、元禄年間に出された辛島宗憲『倭板書籍考』では、

文公家禮儀節 八卷アリ。大明成化中、丘文莊朱子ノ家禮ニ本キ儀節・考證・雜錄ヲ加ヘタリ。

儒家ノ禮法儀章、此書ニ詳也。丘文莊ノ朱子ニ功アル事莫大ナリ。文莊名ハ濬、字ハ仲深、號ハ瓊山、文莊ハ謚ナリ。廣東瓊州人、官位歴々ノ名儒ナリ。大學衍義補、世史正綱モ文莊ノ作也<sup>31)</sup>。  
と述べていて、いずれも該書の特色をうまくつかまえた宣伝文句となっている。

## 2 和刻本の底本について

ところで、和刻本は丘濬『文公家礼儀節』の原本を復刻しているかという点、実はそうではない。見返しに「楊升菴手定」とあるように、後世の手が加わっているのである。「楊升菴」とは明代後期の楊慎（一四八八—一五五九）のことで、当時の中国の書肆は楊慎の名をかたって書物を多く出版したから楊慎の手定であったとはにわかに信じがたいにしても、これが丘濬の原本のままではないことは明らかである。以下、同書の版本状況を少したどってみることにしよう。

まず、丘濬が同書を撰述したのは、その序によれば明の成化十年（一四七四）であり、まもなく刊行され、さらに成化十六年（一四八〇）に再版されている<sup>32)</sup>。ただし、これら初期の版本の所在は確認されていない<sup>33)</sup>。

その後、この書はさまざまなバージョンが出され、中国所蔵の善本を精査した『稿本中国古籍書目書名索引』では十五種類もの版本を挙げている<sup>34)</sup>。そのうち現在伝わる主要版本で筆者が実見したものを和刻本とかかわりのある範囲でとり上げれば、次のようになる。

- A 正徳十三年（一五一八）刊本 直隸常州府刊。「四庫全書存目叢書」經部第一一四冊（莊嚴文化事業有限公司、一九九七年）に影印を収む。八行十六字。後印本だが、成化年間の原刻本の形をよく伝えるものと思われる（図8）。なお、「元明刻朱子著述集成」八（朱傑人編、華東師範大学出版社、二〇一四年）には、前年の正徳十二年（一五一七）刊本の影印が収められているという。その子細については未確認だが、書影によれば版式はこれまた八行十六字であり、正徳十三年刊本と同じ体裁・内容と思われる<sup>35)</sup>。

30) 慶應義塾大学附属研究所・斯道文庫編『江戸時代書林出版書籍目録集成』一（井上書房、一九六二年）一八一頁。

31) 長澤規矩也、阿部隆一『日本書目大成』（汲古書院、一九七九年）影印、一七頁。引用にあたっては句読点を附した。

32) あとにいう正徳十三年（一五一八）刊本（A本）の巻末に次の刊記がある。「家禮儀節初刻於廣城、多誤字。後至京師、重校改正、然未有句讀也。竊恐鄉下邑初學之士卒遇有事、其或讀之不能以句、乃命學者正其句讀。適福建僉憲古岡余君諒以事來朝、謂此書於世有益、持歸付建陽書肆、俾其翻刻以廣其傳云／成化庚子秋八月吉日謹識」。「成化庚子」は成化十六年である。

33) 嚴紹璽『日藏漢籍善本書録』（北京・中華書局、二〇〇七年）は京都大学文学部鈴木虎雄文庫蔵の『文公家礼儀節』八巻が成化年間刊本であるというが（同書一二五頁以下）、未確認。

34) 天津図書館編『稿本中国古籍書目書名索引』（齊魯書社、二〇〇三年）八〇頁。

35) 正徳十二年（一五一七）刊本の書影は中国国家図書館ほか編『第四批国家珍貴古籍名録図録』（国家図書館出版社、二〇一四年）一〇九頁に収められる。



図8 正徳十三年刊『文公家礼儀節』（A本）

- B 万暦刊本 関西大学総合図書館蔵（L二一一四一一一一～三）。九行二十字。巻頭に周孔教、楊廷筠、方大鎮、杜承式、錢時の五人の序を載せる。彼らはいずれも万暦頃に活躍した人物であり、この版は次のC本の祖本かと思われる。
- C 万暦三十七年（一六〇九）刊本 楊廷筠訂、錢時刊。京都大学図書館（中哲史）蔵<sup>36)</sup>。本文の版式は八行十六字であるからA本とほぼ同じだが、なぜか巻頭の朱熹「文公家禮序」は、題だけを載せて序の文を載せていない。図もA本とは異なる。
- D 崇禎刊本 楊慎編。刊行時期は嚴紹璽氏による<sup>37)</sup>。国立公文書館（内閣文庫）蔵で林羅山旧蔵（請求番号：二七四一〇〇九八）。九行十八字。巻首に「正徳庚寅」の楊慎序を載せ、巻一内題のあとには「明 成都楊 慎輯」と記し、丘濬ではなく楊慎の編とする（図9）。この版はまさしく四庫提要・經部・礼類存目三に「別本家禮儀節八卷 舊本題明楊慎編」とするテキストである。そのことは四庫提要に「送葬圖中、至晝四僧前導、四樂工鼓吹而隨之」とあることから確かめられる。この国立公文書館蔵本巻五に載せる「送葬図」では、そのとおりに四人の僧が前導者として描かれているからである。図10にそれを掲げておいた（前の二人が仏僧、後の二人が道士<sup>38)</sup>）。なお、正徳年間に庚寅の歳はなく、楊慎の生卒年などから楊慎

36) 『名古屋市蓬左文庫漢籍分類目録』（名古屋市教育委員会、一九七五年）五〇頁によれば、蓬左文庫蔵の『文公家礼儀節』（一一八・三）は「明丘濬輯・明楊廷筠訂」で万暦三十七年に常州府推官錢時が刊行したものである、C本と同本と思われる。C本を万暦三十七年刊本としたのはこれによる。なお杜信孚『明代版刻綜録』（江蘇廣陵古籍刻印社、一九八三年）第七卷五葉は万暦三十六年の錢時刊行本を載せる。

37) 注33前掲、嚴紹璽『日藏漢籍善本書録』一二六頁。

38) もっとも、この「送葬図」を載せるのは楊慎本（D本）に始まるのではなく、B本がすでに同じ絵柄になっている。他の諸本は「送葬図」を載せていない。

序にいう「正徳庚寅」は「嘉靖庚寅」すなわち嘉靖九年（一五三〇）の誤りと思われる。

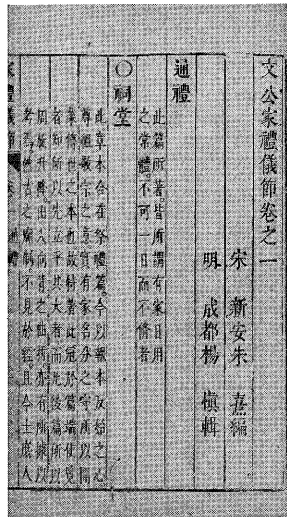


図9 崇禎刊本『文公家礼儀節』（D本）巻一巻首



図10 崇禎刊本『文公家礼儀節』（D本）巻五「送葬圖」

- E 崇禎刊本 楊慎手定。この版の原本は未確認であるが、和刻本『文公家礼儀節』の底本となったものである。和刻本は九行十八字。原本の刊行時期は明記されていないが、和刻本の見返しに「種秀堂藏版 金閭舒瀛溪梓行」というその舒瀛溪は崇禎年間に舒弘諤『通鑑紀略』十卷や馮夢龍『網鑑統一』三十九卷を刊行した人物であるところから<sup>39)</sup>、同じ崇禎年間の刊行と推定される。また楊慎手定とするだけあって、本文の版式はD本とほぼ同じである。
- F 明末刊本 陳仁錫重訂。関西大学総合図書館蔵（C二一三八五—S一——一～三）。十行二十二字。見返しに「陳太史／文公家禮／劉衙藏板」とあり、巻頭に陳仁錫の「重訂文公家禮

39) 注36前掲、杜信孚『明代版刻綜録』第六卷十一葉「種秀堂」参照。また魏同賢編『馮夢龍全集』（上海古籍出版社、一九九三年）第八～一二冊に『網鑑統一』の影印を載せる。

序」を載せる。巻一の内題は「重訂文公家禮儀節」で、ついで「明 長州陳仁錫輯訂」と記す。陳仁錫（一五八一—一六三六）は明末の政治家。この版は以上に見たそれまでの版本とはまったく違う版式である<sup>40)</sup>。

さて、これら諸本の異同に関して特に注意すべきは、B本、D本、E本、F本がいずれも巻八「家礼雜儀」の「司馬氏居家雜儀」の中に女性に関する五項目を載せることである。すなわち、

- (一) 家道不和生自婦人（家道不和なるは婦人より生ず）
- (二) 婦人三従之道（婦人三従の道）
- (三) 女有五不取（女に五不取有り）
- (四) 婦有七去、有三不去（婦に七去有り、三不去有り）
- (五) 治家貴忍（家を治むるは忍を貴ぶ）

の五か条であって、これらは女性に対するかなり差別的な記述であって、男尊女卑的な性格が顕著である。

しかしさらに注意すべきことは、この五か条は本来、司馬光『書儀』巻四の「居家雜儀」にはなく、また『家礼』巻一に収載する「司馬氏居家雜儀」にもなく、さらに『文公家礼儀節』の早期版本（A本、C本）にも載っていないという点である。和刻本はE本を底本とするから当然この五か条を載せているわけだが（図11）、それは『家礼』はもちろん、本来の『文公家礼儀節』とも違うものなのである<sup>41)</sup>。



図11 和刻本『文公家礼儀節』巻八（家礼雜儀）の「家道不和生自婦人」部分

『家礼』なり朱子学の女性観については別途検討を要するが、ともあれ和刻本『文公家礼儀節』が底本

40) このほか、和刻本出版以後の中国刊本の一つとして乾隆三十五年（一七七〇）刊本がある。『丘文莊公叢書』（丘文莊公叢書輯印委員会、一九七二年）に影印を載せる。国会図書館蔵（HB 一一七一四）。扉に「乾隆庚寅年重修／邱公家禮儀節／板藏寶勅樓」とあるように、新たに刻された版本であり、八巻じたてではあるものの、最後の「家礼雜儀」や「家礼附録」は載せていない。

41) 注28前掲、吾妻重二編著『家礼文献集成 日本篇二』解説に、このことにつき簡単に触れておいた。

としたのは丘濬の原本とは違う、明末の崇禎刊本であったことに注意されたい。

なお、そうであれば、この書は中国で底本が刊行されてから、遅くともわずか二十数年ほどで日本で加点、出版されたことになる。これは江戸時代における中国書籍の日本伝播がきわめて早かったことを示す一例でもある。

なお、伊藤東涯（一六七〇—一七三六、名は長胤）が『文公家礼儀節』を何度も繙読していたことについてに触れておきたい。現在、天理大学古義堂文庫には和刻本『文公家礼儀節』の東涯手沢本があり、その書入れから宝永元年（一七〇四）に同書の閲読を始めたことがわかる<sup>42)</sup>。またアメリカ国家図書館には楊慎編『文公家礼儀節』（D本）の東涯手沢本が蔵されており、次の書入れがあるという<sup>43)</sup>。

日本貞享四年、歳次乙卯二月初十日洛陽伊藤長胤閲畢

元禄二年、己巳之年再閲、始乎戊辰、畢乎己巳臘五日

元禄三年癸酉六月十三日、重會畢東涯散人書

これによれば、若き東涯は貞享四年（一六八七）と元禄二年（一六八九）の二度にわたって同書を読んだことになる。元禄三年（ちなみに「癸酉」は元禄六年）に「重會<sup>おわ</sup>畢る」というのは古義堂での会合でとりあげたということであろうか。いずれにせよ東涯もまた『文公家礼儀節』を通して『家礼』を学び、儒教儀礼を研究していたのである。

このほか、新井白石や猪飼敬所が精読、研究したのもまた『文公家礼儀節』であった<sup>44)</sup>。

### 三 和刻本『新刻性理大全』家礼部分（小出永安点）

#### 1 成り立ち

明代初期の永楽十二年（一四一四）十一月、朱子学を重んじた永楽帝は翰林院学士の胡広、侍講の楊榮および金幼孜に「五経大全」、「四書大全」、「性理大全」の纂修を命じた。これを受けてただちに作業が開始され、翌十三年（一四一五）九月にはこの三書が成り、十五年三月（一四一七）には中央官庁と北京・南京国子監、および天下の郡県学に御製の序を冠して頒たれ、全国に普及せられた（『明太宗実録』）。このように「五経大全」、「四書大全」、「性理大全」の三大全は永楽帝の勅撰書としてまとめられたもので、科举試験の標準的解釈にもなり、明代以降における国家教学のバックボーンをなすことになった。このうち「性理大全」七十卷——正しくは「性理大全書」だが、ここでは通称に従う——は五経・四書関係以外の宋代の朱子学者たちによる著作を収めた、いわば朱子学叢書であって、周惇頤や張載、二程、朱熹、蔡元定らの主著とともに、その諸注釈をあわせ載せている。『家礼』ももちろんここに採用された<sup>45)</sup>。

42) 天理図書館編『古義堂文庫目録』（天理大学出版部、一九五六年）一一六頁、「文公家禮（家禮儀節）」条参照。

43) 王重民『中国善本書提要』（上海古籍出版社、一九八三年）二二頁。

44) 新井白石『家礼儀節考』および猪飼敬所『文公家礼儀節正誤』参照。これらは吾妻重二編著『家礼文献集成 日本篇五』（関西大学東西学術研究所資料集刊二十七一五、関西大学出版部、二〇一六年）に影印を収めた。

45) 『性理大全』の成立については、吾妻重二「『性理大全』の成立と『朱子成書』——また黄瑞節および元代の江西朱子学派について」（吾妻『宋代思想の研究——儒教・道教・仏教をめぐる考察』所収、関西大学出版部、二〇〇九年）で考察した。

いま、明の内府刊本によってその内容を示せば、次のとおりである<sup>46)</sup>。

卷一	太極図：周惇頤『太極図・図説』および朱熹『太極図説解』とその注釈
卷二～三	通書：周惇頤『通書』および朱熹『通書解』とその注釈
卷四	西銘：張載『西銘』および朱熹『西銘解』とその注釈
卷五～六	正蒙：張載『正蒙』とその注釈
卷七～十三	皇極經世書：書名は『皇極經世書』だが、実際は蔡元定『皇極經世指要』を収む

む

卷十四～十七	易学啓蒙：朱熹『易学啓蒙』とその注釈
卷十八～二十一	家礼：朱熹『家礼』とその注釈
卷二十二～二十三	律呂新書：蔡元定『律呂新書』とその注釈
卷二十四～二十五	洪範皇極内篇：蔡沈『洪範皇極内篇』を収む
卷二十六～七十	理気以下、詩文まで：朱熹およびその後学の発言や詩文を収む

この「性理大全」の卷十八～二十一に収められた『家礼』は、原文に加えて楊復、劉垓孫、劉璋といった南宋以降の学者の注釈を増補したもので、その後、中国はもちろん朝鮮王朝においても大きな権威をもつことになった。

ここに掲げた和刻本書影は、承応二年（一六五三）刊の『新刻性理大全』七十卷四十一冊であり、卷一の内題に「新刻性理大全」とあり、「温陵 九我 李太史 校正」とする（図12）。国立公文書館（内閣文庫）蔵で、請求番号は二九九一三三。『家礼』はそのうちの卷十八から二十一の四卷二冊を占め、卷十八（家礼一）が家礼図、卷十九（家礼二）が通礼・冠礼・昏礼、卷二十（家礼三）が喪礼、卷二十一（家礼四）が喪礼の続きおよび祭礼である（図13～15）。

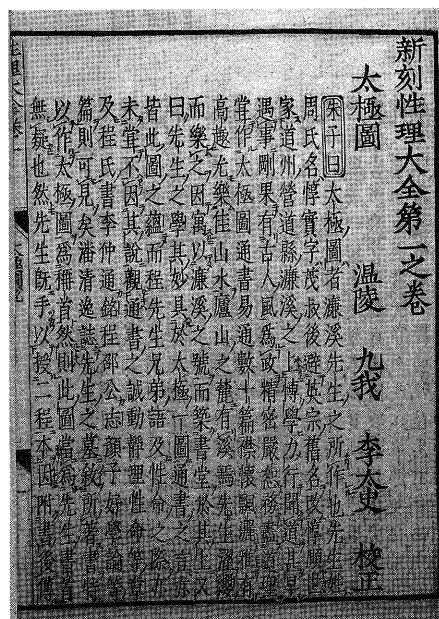


図12 和刻本『新刻性理大全』巻一巻首

46) 「孔子文化大全」（山東友誼出版社、一九八九年）に影印する「性理大全」は明内府刊本と思われ、いまこれによった。

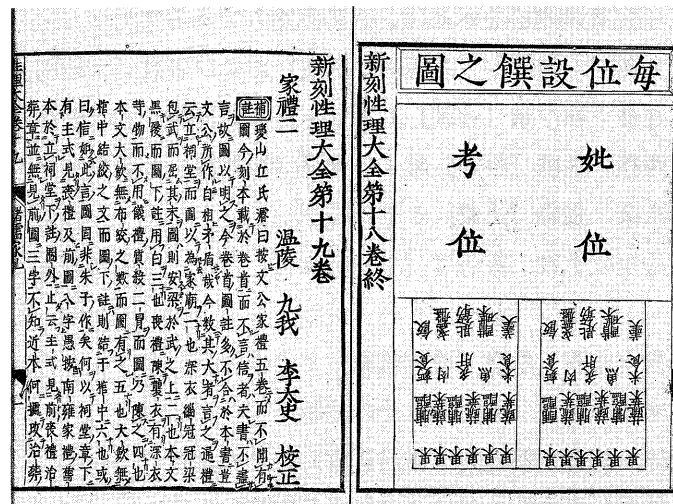


図13 和刻本『新刻性理大全』の『家礼』冒頭部分 1



図14 和刻本『新刻性理大全』の『家礼』冒頭部分 2

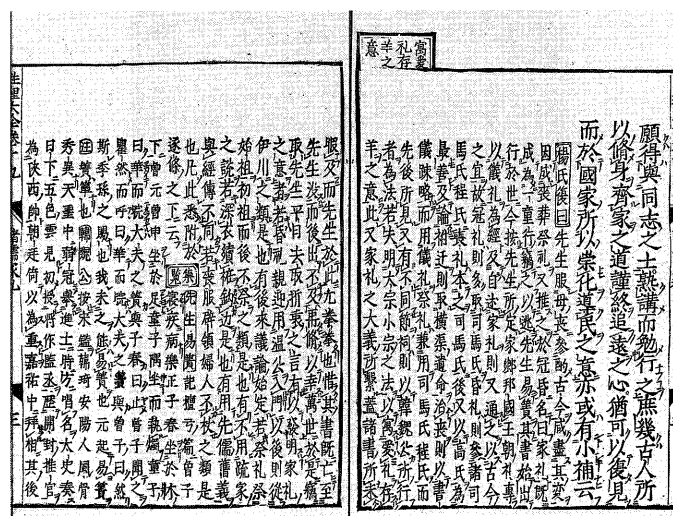


図15 和刻本『新刻性理大全』の『家礼』冒頭部分 3

全体の校点者は小出永安、版元は京都の田中清左衛門と小嶋弥左衛門で、見事な精刻本である（図16）。永安の跋文によれば校点が慶安辛卯年（四年、一六五一）に成り、その二年後の承応二年に出版された<sup>47)</sup>。書名が『新刻性理大全』として「新刻」の語を冠しているのは永楽年間に出版されたものの「性理大全」と違うことを物語っているが、それについてはあとで述べる。

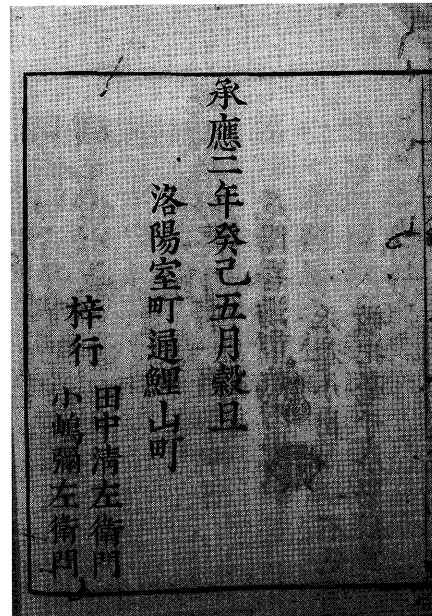


図16 和刻本『新刻性理大全』刊記

小出永安（？—一六八四）は尾張の人で、名は立庭。字は不見、号は永安もしくは永菴（永庵）で、通称は内記。居室を新蕉軒と称する。幼くして穎悟、京都で熊谷活水に師事し、学成って尾張藩儒に任ぜられた。師の熊谷活水（？—一六五五）は藤原惺窩門下四天王の一人に数えられた尾張藩儒・堀杏庵（一五八五—一六四二）の門人である。永安はその後再び京都に遊び、さらに江戸で木下利康（肥後守）に仕える。子に小出蓬山、蓬山の養子に小出侗斎、侗斎の養子に慎斎がおり、のちいずれも尾張藩儒となっている<sup>48)</sup>。

永安の著作としては『中庸章句倭語鈔』八卷四冊、『孝經大義講草鈔』六卷六冊、『孟子序説仮名抄』一冊、『江府紀行』一冊（『詞林意行集』所収）、いずれも刊本があり、写本として『論孟序説仮名抄』一冊が伝わる。

その業績として重要なのは、いくつかの漢籍に校点を施していることである。『新刻性理大全』七十巻はその最も大部なものであるが、他に知られるものとしては次がある<sup>49)</sup>。

47) 注8前掲、長澤規矩也『和刻本漢籍分類目録 増補補正版』（一〇七頁）は承応二年刊本の版元を野田庄左衛門・田中清左衛門とし、田中清左衛門・小嶋弥左衛門による刊本を後印本としているが、あとに見る永安の跋文にいうように、初版が田中と小嶋によるものであることは明らかであるから、訂正が必要と思われる。野田庄左衛門が出版したのは後印本であろう。

48) 細野要斎『尾張名家誌』巻上。

49) 注8前掲、長澤規矩也『和刻本漢籍分類目録 増補補正版』一五八頁、四頁、一〇七頁。

- ・『老子翼』六卷・『莊子翼』十一卷合刻本 承応二年（一六五三）刊、京都・小嶋市郎右衛門。  
その後、後印本多し。承応二年本の影印が長澤規矩也編『和刻本諸子大成』第十輯（汲古書院、一九七六年）に収められる。
- ・『直音傍訓周易句解』十卷 寛文十一年（一六七一）刊、京都・吉野屋惣兵衛
- ・『五倫書』六十二卷 寛文八年（一六六八）刊、京都・小嶋弥左衛門

このうちとりわけ『老子翼』と『莊子翼』の校点は有名である。これらはみな江戸儒学草創期の学者として行なった啓蒙的な仕事といえよう。

さて、『新刻性理大全』和刻本刊行の意図については永安の跋文に説明がある。そこに次のようにいう。

上帝無言而四節自運、萬彙自化、此無他、以蘊其理也。聖人有言而八政正敷、五教正叙、此無他、以盡其性也。曰理、曰性、雖有天人<sup>の</sup>之別、其實一塗、非有二軌矣。大矣哉性理之爲義也。……悲夫、自聖賢既逝而世道日降月衰、舉天下無知所謂性理者。……於戲、有天之未喪斯文也、濂洛諸君子崛起于千有餘年之後、以丕闡性理之教。於是乎孔氏家之青氈再布於天下、可嘉之、可尙之。……方今田中宣重・小嶋廣繁戮力、將鉅梓經營乎不朽之懿、謀以請緒正于我先生熊谷氏。先生大嘉其舉、然官事無鹽而不暇應其需、以故不以庭弗類屬之、校讎且點以倭訓。因拳拳祇載較諸本之異同、隨而折中之、覈字畫之外錯、就而是正之。……

慶安辛卯冬十有一月癸未日

尾陽吾湯市熱田後學

永菴小出立庭不見

敬把毫于洛陽僑寓

（上帝は言うこと無くして四節<sup>おの</sup>自づから運り、万彙自づから化す。此れ他無し、其の理を蘊<sup>ふく</sup>むを以てなり。聖人は言うこと有りて八政正しく敷き、五教正しく叙せらる。此れ他無し、其の性を尽くすを以てなり。曰く理、曰く性、天人<sup>の</sup>の別有りと雖も、其の実は一塗にして、二軌有るに非ず。大なるかな、性理の義たるや。……悲しいかな、聖賢既に逝きてより世道日ごとに降り月ごとに衰え、天下を挙げて所謂る性理を知る者無し。……於戲、天の未だ斯<sup>ほろぼ</sup>の文を喪さざる有るや、濂洛の諸君子、千有余年の後に崛起して、以て丕<sup>おお</sup>いに性理の教を闡<sup>あき</sup>らかにす。是に於てか孔氏家の青氈再び天下<sup>し</sup>に布く。之を嘉<sup>よみ</sup>すべく、之を尙<sup>たつと</sup>ぶべし。……方今、田中宣重・小嶋広繁力を戮<sup>つ</sup>くし、將に鉅梓し不朽<sup>よろしき</sup>に經營せんとし、謀<sup>はか</sup>りて以て緒正を我が先生熊谷氏に請う。先生、大いに其の拳<sup>よし</sup>を嘉とすれども、然れども官事<sup>もろ</sup>鹽きこと無くして其の需<sup>もと</sup>めに応ずるに暇<sup>いとま</sup>あらず、故を以て庭を以て弗類とせずして之に校讎し且つ点ずるに倭訓を以てせんことを属す。因りて拳拳として祇<sup>つつし</sup>んで諸本<sup>くら</sup>を較ぶるの異同を載せ、随いて之を折中し、字画の外錯せるを覈<sup>しら</sup>べ、就きて之を是正す。……

慶安辛卯冬十有一月癸未日

尾陽吾湯市熱田の後学

永菴小出立庭不見

敬<sup>つつし</sup>んで毫<sup>ひで</sup>を洛陽の僑寓<sup>と</sup>に把る

これによれば、永安は「理」を天道における真理、「性」を人間における真理と定義する。そして「性理大全」こそは、それら天と人との真理を明らかにした偉大な書物であるとしてこれを賞賛する。朱子

学者らしい理解といえよう。ついで近年、書肆の田中・小嶋が師の熊谷活水にその校訂を依頼したが公務によりその時間がなく、そこで活水の委嘱によりこれを校点することになったという。ちなみに、活水と永安に校点を促した田中清左衛門は、他に『陸象山集要』六冊や『素問靈枢』十五冊など重要漢籍を出版している。

『新刻性理大全』はその後、京都の野田庄左衛門により後印本が出された<sup>50)</sup>。また、先ほども引用した延宝三年の出版目録『古今書籍題林』では同書につき、

性理大全 作者與四書大全同、性理ノ沙汰諸儒ノ説ヲ集タリ  
と述べ<sup>51)</sup>、辛島宗憲『倭板書籍考』でも、

性理大全 七十卷アリ。補註本ナリ。永楽天子勅修三大全ノ一ナリ。編者四書大全ニ同ジ。點者、  
熊谷立設第子小出永安ナリ。

と宣伝されている。儒書として評判の書物だったといえよう。

ところで、こうして永安によって施された苦心の校点ではあったが、まもなく林鷺峰（一六一八—一六八〇）によってその誤りが指摘されることになった。鷺峰の「性理大全跋」に、

解四書五經、開示其蘊奧、於宋儒備矣。其爲輔翼、無切於性理大全。華本傳來已久。頃年新刊本出而流行于世、便於學者、然倭訓往往不免紕繆。余家藏朝鮮本、限句分讀甚鮮明矣。自去歲之憂、乃把此本而口授伯庸・仲龍、每月各課三夜、新加訓點、以塞修史之暇。螢雪月燈、分影假光、積一年有半餘而全部七十卷、遂終編之功。

（四書五經を解し、其の蘊奧を開示するは、宋儒に於て備われり。其の輔翼を爲すは、性理大全より切なるは無し。華本傳來して已に久し。頃年、新刊本出でて世に流行し、学ぶ者に便なり。然れども倭訓往往にして紕繆を免れず。余が家に朝鮮本を蔵す、句を限り読を分かちこと甚だ鮮明なり。去歲の憂より、乃ち此の本を把りて伯庸・仲龍に口授し、毎月各おの三夜を課し、新たに訓点を加えて、以て修史の暇を塞ぐ。螢雪月灯、影を分かち光を仮り、一年有半余を積みて全部七十卷、終編の功を遂ぐ。）

というのがそれで<sup>52)</sup>、これによれば「性理大全」は宋儒学説理解のための重要文献であり、そのテキストは早くから伝わっていたが、最近新たに出た刊本の「倭訓」には誤りが多いという。ここにいうその刊本が承応二年（一六五三）の永安校点和刻本であることは間違いなく、鷺峰はその訓点の誤謬を正すため家蔵の朝鮮本の句読を参考に、毎月三夜ずつ訓点を加えて門人の伯庸と仲龍、すなわち伯庸と中村祐晴に筆受させたという。鷺峰の『国史館日録』によれば、加點作業は前年の寛文八年（一六六八）三月一日に始まり、翌寛文九年十二月十五日に終わっており、一年十ヶ月ほどの間にきわめて精力的に行なわれたことが確認される<sup>53)</sup>。

50) 注9前掲、市古夏生『元禄・正徳 板元別出版書総覧』四〇四頁。

51) 注30前掲、慶應義塾大学附属研究所・斯道文庫編『江戸時代書林出版書籍目録集成』一、一八一頁。

52) 『鷺峰林学士文集』卷九十九（ぺりかん社影印、一九九七年）。

53) 鷺峰の「性理大全」加點作業については、榎木亨「林家における『律呂新書』研究—林鷺峰『律呂新書諺解』を中心として—」（『関西大学東西学術研究所紀要』第四十九輯、二〇一六年）が参考になる。なお、市立米沢図書館には朝鮮刊本の『性理大全』が所蔵されており、それを見ると句読点が施されているので、鷺峰が見たのもこれと同

もちろん、このような誤りが指摘されたのには、永安の校点が朱子学研究・理解のまだ十分進んでいない江戸初期のものだったことにその一因があるであろう。しかし、鶯峰が加点了という「性理大全」テキストは出版されなかったようであり、永安校点本は「性理大全」七十巻の和刻本唯一のものとして、日本における朱子学普及に果たした役割はきわめて大きいといわなければならない。江戸時代初期の儒学をリードした中村惕斎（一六二九—一七〇二）が閲読した「性理大全」もまた永安校点本であった<sup>54)</sup>。

## 2 和刻本の底本について

次に、和刻本『新刻性理大全』の底本について検討してみよう。

和刻本には巻末の跋文前の牌記に「萬曆癸卯年／仲春月梓行」（図17）とあるので、底本は万曆三十一年（一六〇三）刊本だったと推測されるのだが、実は「性理大全」は明代後期になって坊刻によるさまざまな増注本が出現し、きわめて複雑な様相を呈していて、そう簡単に済む話ではない。



図17 和刻本『新刻性理大全』の巻末牌記

和刻本には各条のあとに、「性理大全」には本来なかった「集覧」と「補注」が附いているという特色もある。この「集覧」は玉峯道人なる人物によって明の正徳六年（一五一—）頃に著わされたもので『性理群書大全』（性理群書集覧）七十巻に附載され、「補注」は同じ頃、周礼なる人物によって著わされたものらしい<sup>55)</sup>。

系統の版本と思われる。

54) 榎木亨「中村惕斎と『律呂新書』—『修正律呂新書』および『筆記律呂新書説』の文献学的考察—」（『文化交渉』創刊号、関西大学東アジア文化研究科院生論集、二〇一三年）。

55) 三浦秀一「明代中期の「性理大全」—東北大学図書館蔵本の書誌学的意義に寄せて—」（『集刊東洋学』第一〇九号、二〇一三年）による。この論考は明代後期に刊行されたさまざまな「性理大全」増注本を紹介していて有益である。なお、「集覧」はもともと「性理大全」の増注本の一つ『性理群書大全』七十巻に掲載されたものである。いま「四庫全書存目叢書」子部第八・九冊に収む。この書は、巻一内題は「性理群書大全」だが、冒頭の「引用姓氏総目」や「目録」では「性理群書集覧」と記す。

また、上述したように、和刻本巻一の内題下には「温陵 九我 李太史 校正」とあり、明の李廷機（一五四二—一六一六）が校正したテキストということになっている。李廷機は福建の泉州府晋江の人で、字は爾張、号は九我。諡は文節。温陵は泉州の雅名である。万暦十一年（一五八三）、殿試で傍眼すなわち進士第二となり、ついで翰林院編集、国子監祭酒、南京吏部・戸部・工部において大いに治績をあげ、さらに北京の礼部右侍郎・左侍郎として要職を歴任し、万暦三十五年（一六〇七）には礼部尚書兼東閣大学士として入閣した。まもなく党争にまきこまれて辞任するものの、政界における活躍や清廉潔白な人格、さらには科挙の試験官としてその名は当時、赫々たるものがあつた。その名望にあやかって、万暦以降、明末に至る時期、李廷機の題署を掲げた文献や科挙受験のための挙業書が民間書肆から大量に出版されたのであつて<sup>56)</sup>、「性理大全」に校正者として名が掲げられるのも、実際に彼が校正にかかわったかどうかはともかく、こうした明末の出版界の事情を反映したものにはほかならない。

いま、李廷機校正と題署する「性理大全」の版本を少し調べてみよう。

A 東京大学総合図書館蔵『新刻九我李太史校正性理大全』（B六〇——二八七）

巻一卷首内題に「新刻九我李太史校正性理大全卷之一／温陵 九我 李太史 校正」とあり、巻末牌記に「萬暦癸卯年／仲春月梓行」とある（図18）。これらは和刻本と同じなので、一見、これが和刻本の底本のように思われるが、実は「集覽」と「補注」を附しておらず、和刻本とは違っている。しかも、内題に「新刻九我李太史校正」と記すのは実は巻一のみで、巻二以降の内題には単に「性理大全卷之〇」と記されるだけなのも和刻本とは違う。特に、両本いずれも「萬暦癸卯年」（万暦三十一年）の同型の牌記をもつのに内容が違うというのは牌記の記載をそのまま信じることができないということであつて、明末出版界の杜撰さを如実に物語るものとなっている。



図18『新刻九我李太史校正性理大全』（A本）の巻末牌記

B 国立公文書館（内閣文庫）蔵『新刻九我李太史校大方性理全書』（二九九—三四）

56) 表野和江「宰相の受験参考書—李廷機と挙業書出版—」（『藝文研究』第八七号、二〇〇四年）参照。

巻一巻首内題に「新刻九我李太史校正大方性理全書／温陵 九我 李廷機 校正」とある(図19)。ただし巻二以降の内題は単に「性理大方書卷之〇」とし、李廷機の名は記されない。内容的には「性理大全」であるにかかわらず、書名を「大方性理全書」としているのも注意が必要である。牌記や刊記はないが、東京大学東洋文化研究所蔵『新刻九我李太史校正大方性理全書』(C四五二四九〇〇)と同本と思われ、そうであれば万暦三十一年(一六〇三)金陵応天府学刊本ということになる<sup>57)</sup>。この版は「集覧」や「補注」をとところどころ載せるものの、『家礼』部分にそれらは見あたらず、和刻本とはやはり違っている。

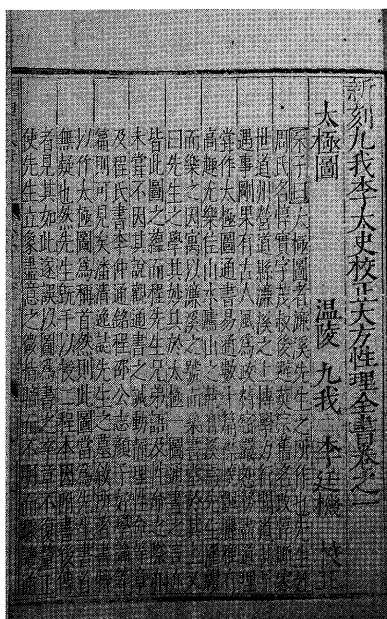


図19『新刻九我李太史校正大方性理全書』(B本)の巻一巻首

C 東京都立中央図書館(諸橋文庫)蔵『新刻性理大全書』(一二二一MW一二五 諸七七五)

見返しに「太史李九我先生纂訂／性理大全／青畏堂藏板」とある(図20)。巻一内題では「新刻性理大全書」とし、その次行の下部には「校」の一字のみあって、すぐ上にもともとあったはずの校者名を削り取っているらしい(図21)。牌記や刊記はない。また『家礼』部分を見るかぎり、「集覧」と「補注」は附せられていない。

57) この万暦三十一年金陵応天府学刊本は注36前掲、杜信孚『明代版刻綜録』第七卷十一葉にも著録する。



図20『新刻性理大全書』（C本）の見返し

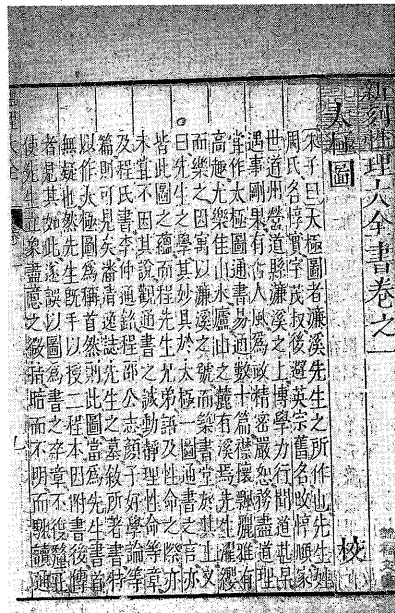


図21『新刻性理大全書』（C本）巻一巻首

このように、以上のA本、B本、C本はいずれも李廷機校正と題するなど、形式的には和刻本と類似するにもかかわらず、「集覧」と「補注」がないか、きわめて不完全なかたちでしか附されていないため、和刻本の底本とはいえない<sup>58)</sup>。

58) このほか、万曆三十一年（一六〇三）刊で李廷機校正と題する版本はほかにもある。中国古籍総目編纂委員会編『中国古籍総目』子部（上海古籍出版社、二〇一〇年）三二頁に著録する呉勉学刻本「新刻九我李太史校正性理大全書」がそれである。ただし筆者未見であり、「集覧」と「補注」をもつかどうかは不明である。

ところが、李廷機校正と題しないのに、内容的に和刻本と類似する版本がある。次がそうである。

D 国立公文書館（内閣文庫）蔵『新刊性理大全』（〇〇五—〇〇〇三）

巻頭の「御製性理大全書序」のあとに「嘉靖十九年葉氏廣勤堂校正重刊」の牌記があり、巻七十卷末に「嘉靖庚申孟秋／進賢堂梓新刊」の牌記がある。これによれば、嘉靖十九年（一五四〇）の広勤堂重刊本を嘉靖三十九年（一五六〇）に進賢堂が新たに刊行したことになる。この版に李廷機の題署はないが、「集覧」と「補注」をもつ点が大きな特徴である。

いまこの書の『家礼』部分について見ると、図22～24にあるように、「集覧」と「補注」がきちんと附されており、和刻本とまったく同じである。このほか、巻首「先儒姓氏」に各人の詳しい経歴を載せている点も一致する。欄外の枠つきの標題もおおむね共通している。版式は十一行二十六字で、和刻本の九行二十字と一致しないなどの違いがあり、また書名も「新刊性理大全」であって、和刻本の「新刻性理大全」と同じではないものの、内容的にはぴったり一致しているのである。そうであれば、このD本が和刻本の底本ではないにしても、祖本になったことは間違いないといえる。

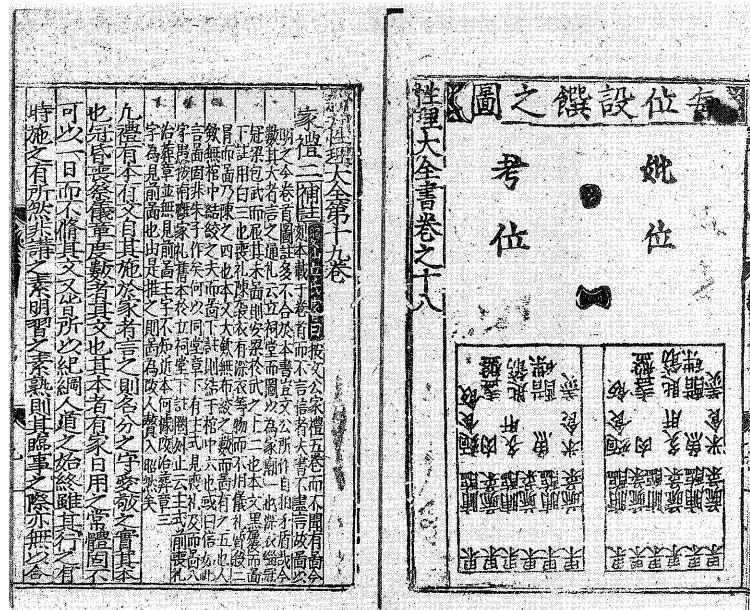


図22 『新刊性理大全』（D本）の『家礼』冒頭部分1

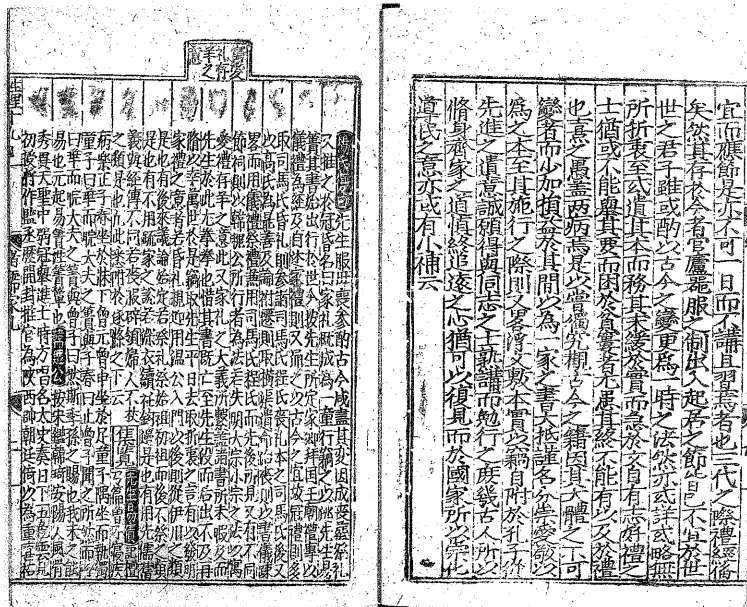


図23 『新刊性理大全』（D本）の『家礼』冒頭部分2

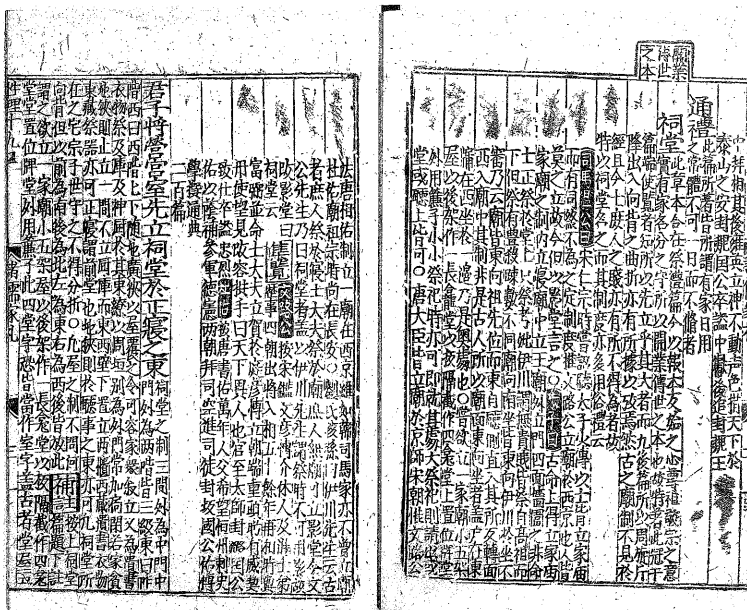


図24 『新刊性理大全』（D本）の『家礼』冒頭部分3

なお、これに関連して、D本と同じ『新刊性理大全』の書名をもつ版本についても見ておきたい。次の二本がそうである。

E 東京大学東洋文化研究所蔵『新刊性理大全』（C四五二四七〇〇）

卷七十卷末に「嘉靖庚申孟秋／進賢堂梓新刊」と、D本と同じ嘉靖三十九年（一五六〇）の牌記があるのだが、『家礼』部分を見るかぎり「集覧」と「補注」は附されていない。李廷機の題署もない。

F 米沢市立図書館蔵『新刊性理大全』（米沢善本三六）

巻首「御製性理大全書序」のあとに「嘉靖壬子年余氏雙桂堂校正重刊」の牌記があり、嘉靖三十一年（一五五二）の刊本である。『家礼』部分を見るかぎり「集覧」と「補注」はない。また李廷機の題署もない。版式はE本と同じであり、年代からいってE本はこのF本を重刻した版本と思われる。

このように、明代とりわけ嘉靖年間以降における「性理大全」の刊行状況はきわめて錯綜しており、同じ書名、同じ題署、同じ牌記でありながら内容が違うなど、人を困惑させるものになっている。これら諸版本の関係をきちんと整理するには別に子細な調査を必要とするが、和刻本の底本に関していえば、ひとまず次のように整理することができよう。

- 一、「性理大全」は明の永楽十三年（一四一五）、勅撰書として胡広・楊栄らにより編纂され、まもなく刊行される。
- 二、明の正徳六年（一五一一）頃、玉峯道人なる人物によって「集覧」が附加され、『性理群書大全』（性理群書集覧）七十巻が成立する。
- 三、この頃、周礼によってさらに「補注」が附加される。
- 四、明代中期以降、ほかにもさまざまな増注本「性理大全」が出現する。中国古籍総目編纂委員会編『中国古籍総目』によれば、『性理大全書』七十巻の刊本は十三種、『新刊性理大全』七十巻の刊本は十二種、『新刻性理大全書』七十巻の刊本は四種、『新刊憲臺釐正性理大全』七十巻の刊本は三種、『新刻九我李太史校正性理大全』七十巻の刊本は二種を数え、さらに『性理群書大全』七十巻や『性理大全会通』七十巻の刊本もあり、まさに汗牛充棟もただならぬ状況である<sup>59)</sup>。

さて、これらの数多くの関連書のうち、和刻本『新刻性理大全』の祖本となったのは嘉靖三十九年（一五六〇）の進賢堂刊本『新刊性理大全』（D本）である。底本もその系統だったはずで、和刻本に万暦年間の牌記が載っていることからして、底本は万暦の重刊本であったと思われる。いずれにせよ、和刻本の祖本および底本は永楽年間のもとの「性理大全」ではなく、「集覧」と「補注」を附加した明末の坊刻増注本だったわけで、十分注意が必要である。

なお最後に、関連事項を二つ述べて参考に供したい。まず「集覧」と「補注」についてであるが、上述した国立公文書館（内閣文庫）蔵の朝鮮版『家礼』四巻本は、巻二から巻四の各巻のあとに「集覧」と「補注」をまとめて載せている。「集覧」と「補注」を各項に附するのではなく、各巻末にまとめて別出しているのであって、増注本「性理大全」を再編した朝鮮の『家礼』テキストとしてたいへん興味深い。

また、「性理大全」を校正したという李廷機には『家礼』一卷の著作が伝わっている<sup>60)</sup>（一部欠）。簡潔な内容であり、みずから家で実際に行なう冠婚喪祭の手引き書として書かれたものと思われる。

59) 注58前掲、中国古籍総目編纂委員会編『中国古籍総目』子部、三一～三三頁。

60) 李廷機撰『家礼』は「四庫禁燬書叢刊」の史部第四十四冊に影印を収める（北京出版社、二〇〇〇年）。